

巻頭言

私にとっての年中行事、OSTEC ジャーナルの編集の季節が春と共にやってくる。老齡を売り物にするのは止めたいが、この頃は何事も、これが最後と思って取り組んでいる。本誌 24 号編集も同じである。

編集していると当然ながら、必ず締め切り内にきちんと原稿を送ってくださる方と、そうでない方に別れる。人間の日常というのは、それなりに忙しく、たとえ 1 枚でも原稿など書く余裕は無いのである。だから、私は従来から原稿の督促というのは、あまりしていなかった。しかし、今回は「特集 平野先生の新著を読む」である。しかも平野先生の新著が出たのは、2 月下旬。感想文を書く時間は当然少ない。やむなく、かなりの方に督促した。これに応じて下さった会員各氏に深く感謝する。そして改めて OSTEC は優れた知的集団だと実感した。

それにしても、新著は平野先生の処女出版である。編集しながら、何となく明るい気持ちになったのは、編集者冥利というものだろうか。編集者とは — どこかで聞いたような科^{まりよ}白であるが — 私は以下のように考えている。

些事や雑事に耐えられなければ優秀な編集者
にはなれない。しかし、寄稿者にたいする温かい眼
がなければ編集者の資格がない。

前川 太市

— 2017 年 3 月 11 日 —